

*はじめに―危機感と期待感

本誌の特集「まつり」が育む地域の力」が企画された背景には、2つの気分が横たわっているに違いない。1つは、現代社会において地域コミュニティが崩壊しつつあるという危機感、いまひとつは、祭礼によって、その危機を克服できるという期待感である。

この「危機感」については、語り尽くされた感もあるが、近年の大学改革の方向性にも注目すべきだろう。十数年前から、各地の大学において「○○コミュニケーション」といった学部・学科・コース名などが急増しているのだ（○に「情報」「異文化」「国際」などが入る）。学生のコミュニケーション能力の欠如への対策であり、そこには、近年におけるコミュニティの崩壊が深くコミットしていることはいままでもない。

大阪大学でも、コミュニケーションデザインセンターに平田オリザ氏を招き、「演劇ワークショップ」によって学生を触発している。平田氏は、劇作家・演出家としての立場から、「コミュニティの形成を助ける力は、やはり演劇の持つ根源的な力だ」と説かれる。私は平田氏に同意したうえで、もうひとつ、「祭礼」にも同様の力があると考えたい。実は、平田氏も演劇と祭礼に通底する力については気付かれており、「なぜ未開の集落で、演劇的なもの、伝統芸能みたいなものや祭りなどが持続されて

まつりが育む地域の力

祭礼と地域コミュニティの形成 ―天神祭と大学祭

高島 幸次 大阪大学コミュニケーションデザインセンター招聘教授
Written by Takashima Kouzi

きたか」と問う（『コミュニケーション力を引き出す―演劇ワークショップのすすめ』PHP新書、2009）。

そこで、以下では天神祭を素材として、祭礼のコミュニティ形成力について紹介するとともに、その限界を浮かび上がらせるために「大学祭」との比較も行いたい。

*天神祭の風土

天神祭は、大阪天満宮（大阪市北区天神橋二丁目）の夏大祭である。同宮は平安中期の949年に創祀され、その翌々年に天神祭が始まった。現在のような大規模な都市祭礼に発展するのは、江戸中期のことである。とくに1724年に大坂市中の大半を焼き尽くした「妙知焼け」以降、祭礼を支える組織としての「講」が結成されたことが大きい。現在も約30の講が「講社連合会」を組織して天神祭を運営している。陸渡御や船渡御も原則として講が単位である。

講は、その結成の動機によって、同業者による講と、地縁（地域）による講の二種に別けられる。前者には、酒造・酒販業の「御神酒講」や、出版業の「大阪書林御文庫講」などがあり、後者には西天満地域の「西天満連合神鉦講」や、菅南連合八町会の「鳳講」などがある。しかし、もともと天満市場の同業者講だった「太鼓中」が、現在では職業・業種を問わなくなっている



天神祭「太鼓中」

ように、また、地縁講として結成された「天神講獅子」が、現在では地域性を薄めているように、この二分類は実態にそぐわなくなりつつある。

各講の規模は、「太鼓中」のように千人もの講員を抱える巨大講から、十数人の小規模講まで多様である。かつての天満宮周辺では、祭日には地元の会社・工場・商店は休み、南森町

交差点の銀行3行（現在は2行）も一斉に休業した。そして、住民の多くは、毎年7月25日の天神祭に向けて、1年の生活秩序を維持していた。現在でも、地元の講員には、そのような空気が受け継がれている。

*「天神講獅子」の場合

では、「天神講獅子」を事例として、「講」の動きを探ってみよう。同講は、現在800人の講員を抱え、「太鼓中」に次ぐ第二の規模を持つ。講員たちは、「獅子舞・梵天」「傘踊り」「四つ竹」および「鳴り物」の4グループに組織され、講元と36名の役員がそれを統括している。右に述べたように、本来の「天神講獅子」は天満宮近くの菅南地区の地縁講であったが、最近はその地域性を薄めている。その変化の意味を考えるには、社会保障や公共政策を専攻する広井良典氏の次の指摘が参考になろう。

戦後の日本社会は、農村から都市へと大移動を行いつつ、都市の中に「カイシャ」と「（核）家族」というムラ社会を作り、それらが経済成長という「パイの拡大」に向かって互いに競争する中でそれなりの豊かさを実現してきた。

ところが「パイの拡大」が期待できなくなった現代では、「カイシャ」や「家族」は変質せざるを得ない。そこで広井氏は、個人が共

同体に一体化する「農村型コミュニティ」ではなく、独立した個人と個人のつながりによる「都市型コミュニティ」の必要性を説くのである（『コミュニティを問いなおす』ちくま新書、2009）。

この指摘に従えば、「天神講獅子」は、農村型コミュニティから都市型コミュニティに脱皮しつつあるようだ。たとえば、東京の企業就職の面接に際し「天神祭には帰郷したい」と申し出た男性や、九州の男性の求婚に対し「天神祭には実家に帰る」ことを条件にした女



天神講獅子「傘踊り」

性が、天満にはいる。遠方への転居により天満の生活コミュニティからは抜けるのに、講の活動は続けたいという「独立した個人」としての意思表示である。天満とは、そのような風土なのだ。

講の活動は、毎年2月以後、役員会を重ねて祭礼を準備する。一般議員の活動としては、「鳴り物」グループが6月の第3金曜から毎週金曜日の午後7時から2時間、天満宮境内で「鳴り物」の稽古を行う。続いて、7月15日から22日までの同時刻には、「獅子舞・梵天」「傘踊り」「四つ竹」が稽古する。暗くなった境内に集まった子どもたちが、鳴り物に合わせて舞い踊る光景は、地域の人だけが知る風物詩となっている。ときには、新入りの小学生を、ベテランの高校生が境内の片隅に呼び出し、個人レッスンしている姿を見ることがある。二人は顔見知りではないが、同じ講のメンバーとして当然のように教え、教えられている。近年の市内において、地域の高校生と小学生が共通の目的のために、コミュニケーションをとる姿は珍しい。

私が子どもの頃は（半世紀前の東住吉区）、地域の小・中・高生と一緒に毎日のように野球をして遊んだ（ヘタな子どもには「ごまめ」としてハンディが与えられた）。半世紀前の大阪では、現在とは異なり、地域コミュニティとしての遊び集団が当たり前だった。天神祭が近づく、その風景が境内に復活



「ローレルハイツ御輿」
日頃はマンションロビーに展示されている

するのだ。残念ながら、天神祭が終わると、他地域と同様に同学年たちとの遊びに戻るらしい。それでも、親に手を引かれて歩いていた小学生が、偶然に出会った高校生に挨拶したあと、親に高校生を紹介している光景は微笑ましい。

*「ローレルハイツ御輿」の場合

天神祭には、講社連合会に所属していない団体もある。その一例として、マンション「ローレルハイツ北天満」（北区池田町一）の自治会を紹介しよう。1979年に環状線「天満」駅の北東に竣工した同ハイツは、毎年天神祭に自前の御輿を出している。千年以上の歴史を誇る天神祭からいえば、その住人は極めて付きの新参者でしかないのだが。

当初の入居者は各地からの寄り集まりであったため、他のマンション同様に、地域住民としての意識も希薄だったという。そこで、81年に同ハイツの初代町会長らが、入居者の寄付金によって自前の御輿を作り、天神祭に担ぎ出したのである。「ローレルハイツ北天満」がそのまま自治会「ローレルハイツ北天満振興町会」を構成していたことが幸いしたに違いない（2011年現在、1342世帯のうち1191世帯が自治会員だという）。住民の地域コミュニティへの理解と、一町会を構成するマンション規模があつて実現したもので、全国的に稀なケースといえよう。現在では、マンション住民だけではなく周辺地域との交流をも生んでいる。さらに、同自治会では、天神祭への参加以外にも、子ども会やゴルフコンペを開催したり、入居者の還暦を祝ったりしながら、コミュニティ形成に努めている。結果、管理費などの不払いが非常に少ないという。

とはいいいながら、少子高齢化の波は同ハイツにも及んできた。そこで、最近では留学体験として韓国などの外国人を御輿の担ぎ手として受け入れている。結果、いまでは地元のお店街などの六基の御輿が連なつて練り歩く「連担」は、天神祭の見せ場のひとつになっている。マンションという独立性の強い住居空間において、このようなフレキシブルな対応が可能なのも、それを受け入れる天満の風土があればこそに違いない。

*「大学祭」との比較

以上、「天神講獅子」と「ローレルハイツ北天満」を例として、天神祭への参加が地域コミュニティの形成に効果があることを紹介してきた。しかし、私は、天神祭への参加が、十分に効果的だとは考えていない。むしろ、それが伝統行事であるが故に、コミュニティ形成面に限って言えば、天神祭には大きな限界があると考えている。

それは、天神祭とは異質な「大学祭」と比較することで明らかになる。大学祭を開催するには、まず、その年のテーマを決めなければならない。その会議では、学年の差や専門分野の違いを超えたコミュニケーション力を試される。平田氏の言を借りれば、「自分のプライオリティーの高いものをどうやって相手に飲んでもらおうかと工夫したり、しのぎを削ったりすることになる」（前掲書）。しかも、限られた時間の中で結論を出さねばならないのだから、きびしい試練となる。

しかし、天神祭などの伝統的祭礼では、その年のテーマを何にするかが話し合われることはない。《年に一回だけ、本殿をお出ましになった神様が、氏地の平安、氏子の無事を見廻されるのを奉祝する》のが、揺るぐことのない毎年のテーマだ。さすがに東日本大震災のあった昨年の船渡御では、各船に「がんばろう！

日本」の統一横断幕が掲げられたが、それもテーマに代わるものではなかった。

このような天神祭と大学祭の違いは、天神祭が伝統行事だからというところで説明することとはできない。なぜなら、大学祭も各大学においては伝統行事として位置づけられているはずだから。その違いは、担い手の継続性の違いにある。大学祭の場合、学生は4年に1回は総入れ替えになる。そのため、企画・実施に際して、全くの初心者（1年生）の意見や想いが採用される余地がある。大学祭の実行委員会の場合では、上級生の発言力の強さに立ち向かうテクニクも必要になるが、1年生のクラスで運営する模擬店を話し合う場なら、全員が初心者として自由にアイデアを出すことができる。また、模擬店の大枠が決まっても、それを実施するための機材の借り出しや、材料の購入、効果的な宣伝手段を考えなければならず、飲食店なら保健所の許可をとるなど山積みの課題を、全て初心者たちが分担しなければならない。

一方、天神祭の場合、半世紀以上の経験者もいるくらいだから、原則として新人に発言権はない。千年以上受け継がれてきた祭りについて、初心者が発言するのはおこがましいということだ。それは、伝統の継承を重んじる立場から言えば当然のことなのだが、コミュニケーション力を高め、コミュニティを形成しようとするなら、上意下達は障害にしかならない。

*おわりに

では、どうすればいいのか。地域コミュニティの再生を真剣に考えるなら、既成の伝統的祭礼に、右で述べたように大学祭的要素を採り入れる必要があると考える。伝統の踏襲と、上意下達の見直しである。それは、農村型祭礼から都市型祭礼への脱皮だといえるが、現実には難しいだろう。

そこで、最後に大学人としての本音をいわせてもらえば、大学祭への参加を必須単位にするとともに、大学祭を地域に開き、地域の祭礼に発展させるといえるのは如何だろうか。大学生のコミュニケーション力を高めるとともに、地域コミュニティの形成に有意義だと考えるのだが、これはさらに難しいか。

CEL

高島 幸次（たかしま こうじ）

● ● ●

大阪大学「コミュニケーションデザインセンター」招聘教授、大阪天満宮文化研究所員。博覧強記を地でいく知識と思わず吹き出してしまう絶妙なトークから「浪花の語り部」という異名も持つ。主な書は、『天満宮御神事御迎船人形図会』（東方出版）、『天神祭の歩き方地図』（大阪市都市工学情報センター）など。